

興禅院と禅海和尚



寺の開山は室町時代の建徳元年(1370 年)鶴見岳の麓、^{えげ}会下(別府市南立石)に無著禅師が開いた寺で。文明元年(1469 年)この地に移された。慶長元年(1596 年)大地震で倒壊、同 5 年細川忠興により再建されました。また、文政元年(1818 年)火災で焼けましたが、同 7 年本堂上棟、明治 3 年(1870 年)火災、同 13 年再建、昭和 48 年(1973 年)火災、同 49 年に再建された。菊地 寛の「恩讐(恩と恨み)の彼方に」で青の洞門を掘った禅海和尚得度の寺として有名になりました。



○仁王像

昭和 34 年に建立されました。平成 28 年 4 月の大地震で壊れましたが、翌年に再建されました。仁王像の口は開いているもの、閉じているものが

あります。これは阿^{あうん}吽を示しています。阿吽とは、一般に吐く息と吸う息を表す言葉。多くは「阿吽の呼吸」と用いられ、二人以上が一つの事をする

ときの微妙なタイミングや気持ちの一致を表すものです。阿吽は、梵語(サンスクリット語)「a-hum」の音写。「阿」は口を開き「吽」は口を閉じて発する声のことで、そこから「呼気」と「吸気」の意味となり、両者が息を合わせることを「阿吽の呼吸」と言うようになった。密教では、阿吽を「万物の根源」と「一切が帰着する知徳」の象徴とされている。これは梵語の悉曇(しったん)の字母表で、最初の韻が「阿(a)」、最後の韻が「吽(hum)」であることに由来する。悉曇(しったん)の字母表は日本語の 50 音表の原点になっている。



○禅海和尚得度の石碑

禅海和尚は興禅院で得度している。本人の直筆と兄弟子本寺 24 世、大安海翁大和尚の書物でこの寺での得度(剃髪して仏門に入る事)が明確と成りました。



○禅海和尚とお弓の石像



○梵字（ぼんじ）

カーンといいます。古代インドの文字で仏教上の権威ある象徴として梵字が刻まれています。



○宝篋(きょ)印塔

宝篋印陀羅尼經（梵文の呪文を翻訳しないでそのまま読誦するもの）を納めた供養塔で塔の4面に梵字が掘られています。文政8年乙酉（1825年）に建てられています。この寺では一番古いものです。礼拝する事で罪障が消滅し苦を免れ長寿を得ると言われています。



○船型浮き彫り別石六地藏

六道を救済する地藏です。六道とは仏教の世界説で地獄・餓鬼^{がき}（生前の悪業の報いで、餓鬼道に落ちた亡者）・畜生^{しゅら}（インド神話の悪神）・人・天の6つの苦難に満ちた世界

界をいい、人間は仏菩薩^{ぶつぼさつ}（釈迦^{しゃか}）を念ずることでこれらの世界に落ちることから救われるという。平安中期以降浄土教の発展とともに教化に役立たせるため

よく使われた。



建させるために作られたものです。

○由布四国八十八ヶ所弘法大師像

由布院町内に四国八十八ヶ所があり、第一番札所となっている。由布八十八ヶ所第一番は明治36年(1903年)に建立されています。これは文政6年(1823年)佛山寺五代和尚が由布院郷内に弘法太師像、八十八ヶ所を最初に建立したものを再



○禅宗の戒律碑

不許葷酒入山門

臭い酒を飲んで山門に入ることは許可しないという意味で禅宗の戒律を刻印したものです。



○法華千部供養塔

寛政12年庚申(1800年)に建てられています。



○馬頭観音

宝冠に馬頭をいただき憤怒の相を表した観音菩薩像。観音像で憤怒相をなしている唯一のもの。馬の供養に結びつき、江戸時代の庶民の間に信仰が広まって行きました。



○
釈迦と 13 人の弟子の像
昭和 34 年建立された。



○キリシタンの墓
明治までは神仏習合の流れがあり、その考えから考察すると教会や礼拝堂がここのお寺の中にあっただのではないかとされています。



○十六羅漢像
カメラマンで「やまびこ」のご主人が撮影したところ写真の像に金粉が写り、その後何人もの人々が撮影したが、金粉が写ることはなかった。易の人に見てもらったところ、撮影した人の守り神と言われ大事に保管されている。